

石川啄木の危機意識と創作活動

—「歌稿ノート 暇ナ時」と「ローマ字日記」を中心に—

明治大学教授 池田 功

★啄木の人生(およそ26年2カ月)の危機の時

(1) 16歳の時、旧制中学5年の最終学年を中退し、文学で身を立てようと上京するが病を得て父に迎えられて帰郷。

(2) 21歳の時、住職の父が宗費怠納のため寺を追われ、さらに啄木も代用教員をしていた渋民尋常小学校を辞めて、一家で北海道に離散した。

(3) 函館に行き、大火にあつて札幌へ、さらに小樽を経て釧路に流離の生活。

第一部 「歌稿ノート 暇ナ時」

1, 石川啄木の明治41年(1908)前後の行動

<明治40年(1907年)(満21歳)>

- ・4月に渋民尋常小学校代用教員を免職
- ・5月に函館に一家で移住(函館の人達の世話により弥生尋常小学校代用教員等、函館日日新聞社遊軍記者等をする。
- ・函館大火により職を失い、9月より札幌に、さらに10月に小樽日報社記者に。
- ・(日記・明治40年9月19日)「あゝ我誤てるかな、予が天職は遂に文学なりき。何をか惑ひ又何をか悩める。喰ふの路さへあらば安んじて文芸の事に励むべきのみ、この道を外にして予が生存の意義なし目的なし奮励なし。予は過去に於て余りに生活の為に心を痛むる事繁くして時に此一大天職を忘れたる事なきにあらざりき、誤れるかな。予はたゞ予の全力を挙げて筆をとるべきのみ、貧しき校正子可なり、米なくして馬鈴薯を喰ふも可なり。」

<明治41年(1908年)(満22歳)>

- ・1月より釧路新聞社記者
- ・4月家族を函館の後に義弟となる宮崎郁雨に預け、単身上京。
- ・5月5日(向井宛)「今度の上京は、小生の文学的運命を極度まで試験する決心に候」
- ・4月28日、与謝野鉄幹、晶子夫妻と再会。しばらく滞在。
- ・5月2日、森鷗外宅の観潮楼歌会に出席。
- ・5月4日、金田一京助の友情で、赤心館に同宿。

- ・ 5月11日（宮崎宛）、「漱石の虞美人草のゆき方ならアレ位のものを二週間で書ける」
- ・ 5月16日（日記）、「神経痛であらうか、左の胸が痛い」
- ・ 6月4日（森鷗外宛）、「新小説なり何なりの人へ御紹介状でも下さるわけにはまわりませんでせうか（中略）書いてみて飯が食へるものなら、私はいくらでも書きます。」
- ・ 6月17日（日記）、「一昨晚剃刀で自殺した川上眉山氏の事について考へた。近来の最も深刻な悲劇である。知らず知らず時代に取り残されてゆく作家の末路、それを自覚した幻滅の悲痛！（中略）何といふたましい事であらう。創作の事にたづさはつてゐる人には、よそ事とは思へない。」

★上京後、一ヶ月余りで、「菊地君」「病院の窓」「天鷲絨」「二筋の血」等の短編小説を書き、その売り込みに奔走するが失敗。生活に困窮。創作活動のゆきづまりを自覚。焦燥と幻滅と悲哀に呻吟。

<短歌が爆発的に詠まれる>

★6月24日（日記）、「昨夜枕についてから歌を作り始めたが、興が刻一刻に熾んになつて来て、遂々徹夜。（中略）昨夜百二十首の余。」「国木田独歩氏、わがなつかしき病文人が遂に茅ヶ崎で肺に斃（たお）れた。」

★6月25日（日記）、「頭がすっかり歌になつてゐる。何を見ても何を聞いても皆歌だ。この日夜の二時までに百四十一首作つた。父母のことを歌ふ歌約四十首、泣きながら。」

<死・自殺の悲哀に苦悩する>

・ 6月27日（日記）、「ああ、死なうか、田舎にかくれやうか、はたまたモツト苦闘をつづけようか、？ この夜の思ひはこれであつた。何日になつたら自分は、心安く其日一日を送ることが出来るであろう。安き一日！？ 死んだ独歩氏は幸福である。自ら殺した眉山氏も、死せむとして死しえざる者よりは幸福である。作物と飢餓、その二つの一つ！ 誰か知らぬまに殺してくれぬであらうか！ 寝てる間に！」

（余談であるが、これとほとんど同じことを芥川龍之介の遺稿の小説『歯車』（死後の昭和2年発表）のラストシーンに書いている。「誰か僕の眠っているうちにそっと絞め殺してくれるものはないか？」）

・ 6月29日（日記）、「目をさますと、凄まじい雨、うつらうつらと枕の上で考へて、死にたくなつた。死といふ外に安けさを求める工夫はない様に思へる。生活の苦痛！ それも自分一人ならまだしも、老いたる父は野辺地の居候、老いたる母と妻と子と妹は函館で友人の厄介！ ああ、自分は何とすればよいのか。今日もまた下宿料が払へぬではないか？ To be, or not to be? 死にたい。けれども自ら死なうとはしない！ 悲しい事だ、自分で自分を自由にしえないとは？」「死といふ事が執念（しつこ）く頭に絡んで来る。此間作つた『大木の枝ことごとくきりすてし後の姿のさびしさかなや』といふ歌が辞世の歌に可いなどと考へた。しまひには死ぬ時の事がいろいろと想像されて、それが何となく快い様な気になつた。」

・ 7月16日、17日（日記）、「死ぬと考へながら、些とも其手段をとらぬ事を自分で疑つてもみた。老いたる母の顔が目に見えた。若し自分が死んだら、と思ふと、涙が流

れた。」

・7月18日（日記）、「生命その者に対する倦怠—死を欲する心が時々起つて来る。歌を作つてるのは、煙草をのむと同じ効能がある。それ以上の事はない。」

★啄木の評論「弓町より 食ふべき詩」（明治42年11月、12月「東京毎日新聞」）
「私は小説を書きたかつた。否、書くつもりであつた。又實際書いても見た。さうして遂に書けなかつた。其時、丁度夫婦喧嘩をして妻に負けた夫が、理由もなく子供を叱つたり虐（いじ）めたりするやうな一種の快感を、私は勝手気儘に短歌といふ一つの詩形を虐使用する事に発見した。」

・7月27日（日記）、「女中の愛ちゃんが来て、先月分からの下宿料の催促、いふべからざる暗怒をかくして、自分は随分冷ややかに応答した。女中は五六回つづけて来た。とうとう、先月分の十五円若干を、朝夕までに払はなければお断りするといふ事になつた。自分一個の死活問題が迫つたといふ感じが、妙に深く自分の胸にひびいた。と、一種の深い決心が起つた。決心！——あらゆる不安を圧搾して石の如くした様な決心！」、「電車で春日町まで来て、広い坂をテクテク上ると、また汗が出た。電車が一台、勢ひよく坂を下つて来た。ハツト自分は其前に跳込みたくなつた。然し考へた。自分は自分の歌をかいた扇を持つてゐる。屹度これで自分だといふ事が知れるだろう。——かくて予は死ななかつた。そして、新聞記者をした事があるだけに、自分の轢死の記事の新聞に載つた体裁などを目に浮かべた。」

・7月29日（宮崎宛）、「此一ヶ月間に僕の経験した——ひそかに経験したメンタルテンペスト（＝嵐、暴風雨）は、今朝になつて考へると頗る興味のある、且つ意義のある事であつたと思へる。（中略）然し僕は實際こんな暴風、——殆んど一点のゆるみも隙もない煩悶苦痛を感じたのは初めてだ。（中略）兎に角僕は遂に死にかねた。」

★大沢博（岩手大学名誉教授、教育学部）「この時期の啄木の病的な状態を、筆者は抑うつ神経症とみなした。抑うつ神経症は、悲哀、抑うつ、不安感情、外界への興味の喪失、制止症状のほか、攻撃性の内向、すなわち罪悪感、自殺念慮などの精神症状のほかに、不眠、食欲低下、性欲低下、知覚過敏などの身体症状があり、日内変動がみとめられることが多く、対象喪失を誘因とした発症の多い神経症である。」

2, 「明治41年歌稿ノート 暇ナ時」

（明治41年6月14日～10月10日までの652首）

★★この明治41年の歌稿ノートの中でも、小説を書けぬ苦悩の中で突如短歌が火山の噴火のように湧き出てくる3日間がある。

・6月23日、夜から暁にかけて、55首

・6月24日、午前50首、

・6月25日、141首

（これらの合計246首の作品中、114首を歌誌「明星」（7月号）に「石破集」とし

て発表している。)

★ここでは、まず3日間の爆発的な歌の特徴について考えたい。

(1) 歌集『一握の砂』(明治43年12月刊行・三行分かち書き)に含まれる秀歌が5首ある。

- ・頬につたふ涙のごはず一握の砂を示しし人を忘れず
- ・己が名を仄かによびて涙せし十四の春にかへるすべなし
- ・東海の小島の磯の白砂に我泣きぬれて蟹と戯る→(たはむる)
- ・灯(ともし)なき室に我あり父と母壁の中より杖つきて出づ
- ・たはむれに母を背負ひてその余り軽きに泣きて三歩あるかず→(あゆまず)

(2) 6月25日の日記に、「父母のことを歌ふ歌約四十首、泣きながら。」と書いている通り、父と母を詠んだ歌が多い

<父>

- ・わが父は何に怒るや大いなる青磁の瓶を石上に撃つ
- ・故さとの父の咳する度にわれかく咳すると病みてある
- ・我れ父の怒りをうけて声高く父を罵り泣ける日思ふ
- ・わが父は六十にして家を出で師僧の許に聴聞ぞする
- ・父と我無言のままに秋の夜中並びて行きし故郷の路
- ・やや老いて父の怒らずなりし頃我れわが君を思ひそめてき
- ・わが父が蠟燭をもて蚊をやくと一夜寝ざりしこと夢となれ

★【啄木の父一禎】岩手県の農家の五男に生まれ、曹洞宗の葛原(かつらはら)対月の下で僧侶となり一禎となる。その後、常光寺の住職になるが、ここで啄木(本名は一(はじめ))が生まれる。翌年、隣村である渋民村の宝徳寺に移転する。一禎は、仏道修行のかたわら和歌を学び、約3800首の『みたれ芦』と題する歌稿を残している。「降りしきる門の雪をは払へとも身につむうきのやり所なし」「一枝を折りてかざせば墨染も花の衣と人や見るらむ」のような歌がある。啄木の臨終にも立ち会っている。娘の夫の鉄道勤務地の高知市で亡くなった。享年78。写真からは、痩せていて厳格な感じの人に見える。

※高柳蓀子「父」(『岩波 現代短歌辞典』)「現代短歌にはたくさんの父が登場するけれども、古歌に父を扱った例は乏しい。『万葉集』では父母がいっしょに歌われ、合わせて両親を表すにとどまり、以後は、父も母も歌の題材とみなされなかつたらしく、勅撰集にはまったく見えない。父権が強まった封建時代も父は歌われにくかった。」「(近現代の)父を詠む歌には、作者の性別が反映する。」(娘は父に庇護される安心感等が詠まれるが、男の子の方は喜びだけでなく緊張や不安が詠まれることが多い。安易に甘えない。)

<母>

- ・母われをうたず罪なき妹をうちて懲せし日もありしかな
- ・母よ母このひとり児は今も猶乳の味知れり餓ゑて寝る時
- ・我が母は今日も我より送るべき為替を待ちて門に立つらむ

※たはむれに母を背負ひてその余り軽きに泣きて三步あるかず（あゆまず）

（武川忠一『岩波 現代短歌辞典』）「男の子から母へは、共通する母性のぬくもりや、分け与えられた、いのちの意識が強い。その上に立つ、無条件の思慕的情感がある。この根源的な、いわば生物的なものとのつながりは、万葉以来、今後の歌にも残るだろう。」

- ・われいまだわが泣く顔をわが母に見せし事なし故にかなしき
- ・われ今日も不倶戴天の敵（アダ）を見て剣を抜かず老いたる母よ
- ・あたたかき飯を子に盛り古飯を湯にかけ給ふ母の白髪
- ・母君の泣くを見ぬ日は我ひとりひそかに泣きしふるさとの夏
- ・わが母の死ぬ日一日美（よ）き衣を着せむと願へりゆるし給ふや

★【啄木の母、カツ】一禎の師僧対月の妹。一禎より3つ年上で29歳の時に結婚。一男三女を産んだ。一人息子の啄木を溺愛した。66歳で永眠。写真が残っていない。

<父母・親>

- ・天に問ふ今もし一人我しなばわが父母をいかに処するや
- ・灯（ともし）なき室に我あり父と母壁の中より杖つきて出づ
- ・父と母猶ましませり故に我死ぬを得ざりとまた筆をとる
- ・父母のあまり過ぎたる愛育にかく風狂の児となりしかな
- ・妻と子と父と母とは各々に手ランプをもて暗中を来る
- ・津軽の海その南北と都とに別れて泣ける父と母と子
- ・我いまだ髯を生やさぬそのうちに老いたる親をかなしみて泣く
- ・父母は老いていませりあはれ蚊よ皆来て私の瘦脛を螫（さ）せ
- ・猛然として我れ父母の名を念じ敵を追へどもやがて帰り来ぬ

<考察>

- ① 父母の歌語であるが、この3日間の後の「暇ナ時」には7首しか詠まれていない。つまり、圧倒的にこの3日間に集中的に詠まれていることが分かる。啄木が最も落ち込んだ時に、それを慰めてくれる存在は父母であったと思われる。
ただし、7月23日には『一握の砂』に含まれる「一塊（いちかい）の土に涙し泣く母の肖顔つくりぬかなしくもあるか」がある。ここには「泣く」「涙」「かなし」のすべてが含まれている。
- ② 父母に愛されて育った幸せな子供の頃の思い出にひたっている。
- ③ そして、老いていく父母に何の親孝行もしてやれていないという後悔である。
- ④ 啄木の『一握の砂』（551首）と『悲しき玩具』（194首）＝合計745首の中で、「父」は8首であり、「母」は13首であり、「父母」は「ふぼ」が1首、「ちちはは」も1首である。そうであれば、なおこの3日間の父母の歌語の数がいかに多いかが分かる。

(3) 同じく6月25日の日記に、「父母のことを歌ふ歌約四十首、泣きながら。」とあるように、「泣く」(あるいは「涙」という言葉も多い。

・君泣くをみてかなしまずなりしより眠れる恋を擲(なげうち)て来ぬ

※頬につたふ涙のごはず一握の砂を示しし人を忘れず

(梅内美華子「なみだ」(『岩波 現代短歌辞典』)『万葉集』では挽歌に涙の表現が見られ、主要な主題の一つ)(中略)近代の啄木は(この歌を詠み)手放しにセンチメンタルにうたった。)

・帰り来し心をいたむ何処にてさは衣裂き泣きて歩める

・わが胸の底の底にて誰ぞ一人物にかくれてさめざめと泣く

・限りなく高く築ける灰色の壁に面して我一人泣く

・己が名を仄かによびて涙せし十四の春にかへるすべなし

・憂き事の数々あるが故に今君みてかくは泣くと泣く人

※東海の小島の磯の白砂に我泣きぬれて蟹と戯る(『一握の砂』の巻頭歌)

・凧(こがらし)や藍色の血にまみれたる鬼大木をゆるがして泣く

・「何故に泣くや」答へぬ「わが恋のまことならぬを恥じて我泣く」

・われ知らず君が泣きよる木と我のもだし凭(もた)る木といづれ古きや

・庭の木七本ゆれど一本も動かさず地(つち)に座して涙す

・わがかぶる帽子の庇(ひさし)大空を覆ひて重し声をあげて泣く

★一髪の危機今去りて兄は生くとかける文みて泣き笑ひする

★やめる兄をこの一心に癒さむと勇ましくいふ君にまた泣く

(5月26日の日記に、北海道に残した子供の京子がジフテリアになって医者にかかっているという手紙があったことを記している。妻の節子からの手紙を読み、「ああ、ジフテリア! 妻の心は! と思ふと思ふと涙が落ちた。」とある。)

・津軽の海その南北と都とに別れて泣ける父と母と子

(これも事実である。)

・我れ父の怒りをうけて声高く父を罵り泣ける日思ふ

・我いまだ髯を生やさぬそのうちに老いたる親をかなしみて泣く

・我時々見知らぬものに誘はれて曠野の中に捨てられて泣く

・われ人にとはれし時にふと母の齢(トシ)を忘れて涙ぐみにき

・夏来れど袷をぬがぬ人々は我と来て泣け夜の明くるまで

・母君の泣くを見ぬ日は我ひとりひそかに泣きしふるさとの夏

※三枝昂之(「涙」『石川啄木事典』)「啄木は泣くのが好きな歌人である。処女歌集の巻頭歌にいきなり「われ泣きぬれて」と出てくる。それを受けるのが次の二首である。「頬につたふ／なみだのごはず／一握の砂を示しし人を忘れず」「大海にむかひて一人／七八日／泣きなむとすと家を出でにき」、自分がまず泣き、次に涙をぬぐわない人を思いだし、そして泣こうとして家を出る。つまり三首で涙が強く印象づけられる。巻頭二首目は歌

集名をも含んでいるから、＜啄木＝泣く＝涙＞という関連性の強さはいよいよ紛れもない。」

「この感傷性の突出にこそ、近代短歌の特徴が現れている。和歌における＜涙＞が＜人生的なあわれ＞を表現するための錬磨された歌語だったのに対し、近代短歌のそれは、感じやすい青春の直接性だった。啄木の掲出歌は感傷性の露出によってそのことを示している。」

＜考察＞

- ① 3日間以後の「暇ナ時」の「泣く」が入った歌は21首あり、「涙」は6首ある。合計27首であり、3日間ほどではないがそれなりに使う歌語であることが分かる。
また、『一握の砂』の冒頭近くにある有名な「大海にむかひて一人七八日泣きなむとすと家を出でにき」の歌が、7月18日に詠まれている。
- ② 『一握の砂』『悲しき玩具』＝745首の中で、「泣く」は29首ほどある。「涙」は14首ある。そういう意味で「泣く」は結構多い歌語である。もっとも啄木の代表的な歌語は「悲し」であり、100首を越えている。

(4) 「死」(あるいは「墓」「葬る)」の言葉も多い

- ・大海にうかべる白き水鳥の一羽は死なず幾千年も
- ・西方の山のかなたに億兆の入日埋めし墓あるを思ふ
- ・君に問ふ我らかくある一瞬に幾人生れ幾人か死ぬ
- ・大版の黒き表紙の文字かかぬ千巻の書に埋れて死す
- ・うら悲し音(ね)に啼(な)きしきり病鳥はかの青空にあくがれて死す
- ・千年に唯一度鳴る山上の鐘のひびきにおどろきて死す
- ・落ちて死ぬ鳥は日毎に幾万といふ数しらず稲は実らず
- ・君よ君君を殺して我死なむかく我がいひし日もありしかな
- ・もとともに死なむといふをしりぞけぬやすけき一時を欲り
- ・日一日巷々をゆきつきし遂にも逢はず死せる我が児に
- ・わが若き日を葬りて立てたる石にくちづく君は日も夜も
- ・わが女空ゆく鳥の影見つたゞしほしほと膝に死ににき
- ・火をつくる大エンジンのかたはらに若き男ら刻刻に死す
- ・初めよりいのちなかりしものの如ある砂山を見ては怖るる
- ・わが友は北の浜辺の砂山の浜茄子の根に死にてありにき
- ・四度名をよべど答へずこたへずば我が死ぬ日まで答へずてあれ
- ・までどまでど尽くることなき葬りの無言の列ぞわが前を過ぐ

(大沢博「幻覚体験と思える歌である。たいへん不気味な歌である。」)

- ・目ぞ曇り日月を見ぬこと既に八千余日死なむともせず
- ・父と母猶ましませり故に我死ぬを得ざりとまた筆をとる
- ・若しも我露西亜に入りて反乱に死なむといふも誰か咎めむ

<考察>

- ① 3日間以後の「暇ナ時」には、「死」が18首ある。この中には『一握の砂』に採られた「怒る時かならず一つ鉢を割り九百九十九割りて死なまし」がある。「墓」は1首「夜半の雨杉生の隣焚いて人をおどせし頃を思ひぬ」があるが、これは子供時代に寺にあった墓地での遊びの体験を詠んでいると思われる。また、「葬り」が一首あるが、「われつねに一人歩みぬわが父の葬りの日にも遠き旅にも」と、「父の葬りの日」が詠まれている。「むくろ」(=なきがら)の歌語の歌として「ただよへる方舟見ればむくろ二つ枕ならべぬ眠るごとくに」がある。
- ② 『一握の砂』『悲しき玩具』=745首の中で、「死」は「あをじろき頬に涙を光らせて／死をば語りき／若き商人(あきびと)」での1首のみである。「墓」も「人みなが家を持つていふかなしみよ／墓に入るごとく／かへりて眠る」の1首のみであるし、「葬る」にいたっての歌は無い。つまり、自分の歌集にまとめた時には、このような意味で暗い歌語の歌は採らなかつたということなのかと思われる。
- ③ 逆に考えれば、啄木の心の底の暗い部分を表現する言葉として使われたのであると考えられる。

★★このように、単身上京した啄木は、何とか小説で生活費を得ようとするがうまくゆかず、自殺の危機意識の中で突如短歌を爆発的に読んだ。その創作にこそ、啄木が心の安定を図ろうとしたということが考えられる。

第二部 「ローマ字日記」

1 当時の啄木の状況

- ・明治41年（1908年）
- ・9月23日、(日記)「(妻の節子からの手紙) 家族会議の結果、先ず一人京子をつれて上京しようかと思つたが、郁雨君にとめられた」
- ・明治42年（1909年）
- ・2月24日、朝日新聞社の佐藤真一から入社の誘いを受ける。
- ・★2月27日、母から手紙。「母は三月になつたら何が何でも一人上京すると言つて来た。」
- ・3月12日、妻節子からの手紙。
- ・3月30日、(日記)「京子の事母や妻の事が烈しく思い出された。ああ三月も末だ。」
- ・3月1日、朝日新聞社校正係として正社員に。月給25円、夜勤一夜一円。つごう35円ほど。
- ・4月1日から日記のローマ字書きがはじまる。

2, 「ローマ字日記」とは

(1) 正確には「NIKKI.MEIDI42 NEN.1909.」

- ・ローマ字で書かれた明治42年（1909）年4月6日から6月1日までの日記と、それに「二十日間」の要約がつけられた、2ヶ月間の日記。(全体でも75日間)
- ・ただし、一日がきわめて長いことがある。例えば、4月10日は四百字詰め原稿用紙にして、20枚くらいになっている。「四月十日の記述は意識のドラマといつてもいいように思える」(鈴木志郎康「ローマ字日記」の表現的意味)

(2) 刊行

- ・昭和23年（1948年）、石川正雄（啄木の長女京子の夫・婿）編集で『ローマ字日記』初めて刊行。
- ・昭和29年（1954年）、岩波書店刊行の『啄木全集』にローマ字日記収録され、京都大学教授の桑原武夫が解説した。
- ・ドナルド・キーンが昭和29年（1954年）に京都大学大学院に留学している時に、用事があつて桑原宅を訪問した時に、「ローマ字日記」の話題となり、それを借りて読んだところとても感激し、2年後に部分訳を行いアメリカでアンソロジーに収めた。
- ・昭和52年（1977年）、岩波文庫に納められる。解説は桑原武夫。

3 ローマ字書きということ

(1) 啄木自身は、妻によまれたくないためであるとしているが、しかし、節子は女

学校を出ているので読もうと思えば読めた。しかし、読もうとする気持ちがないとなかなか読みにくい。

(2) 桑原武夫の解説。「(ローマ字書きをしたことにより) 彼の上にのしかかるいくつかの抑圧から逃れることができた、と考えられる。」として、以下の三点を挙げている。

「(1) それが家族の人々には読まれない、という意味での精神的、さらに倫理的抑圧から。(2) 日本文学の伝統の抑圧から。(3) それらをふくめて、一般に、社会的抑圧から。」

・また桑原は、「それらから逃れて、この日記のうちに彼は一つの自由世界をつくることによって、その世界での行動すなわち表現は、驚くべき自由なものとなりえた。露骨なことも無遠慮に書けた、というだけの意味でなく、むつかしい雅語や漢字の表現からの脱却が可能あるいは不可避となり、そこに自由な新しい日本語の表現法が見出された。」と書いている。

4 時代背景としてのローマ字書きの流行

(1) 明治18年(1885年) — 「羅馬(ローマ)字会」が結成された。26字のローマ字は世界文字であり、漢字・仮名を廃止しローマ字を使えば外国人も日本語を学びやすいし、日本語も外国に広がると主張。

(2) 明治38年(1905年) — 西園寺公望を会頭に「ローマ字ひろめ会」が組織された。これに応じて文学者の北原白秋、平野万里、土岐哀歌(TOKI AIKA)(歌集『NAKIWARAI』=三行分かち書き)等が詩や短歌をローマ字で発表した。

・啄木も敏感に反応している。「明治四十二年創作ノート」に、小説断片「Sakausi-kun no Tegami」(坂牛君の手紙)等をローマ字で書いている。

5、「ローマ字日記」の内容

(1) 家族の上京の問題

★啄木にとっての問題の一つが、家族の上京である。前年から家族は上京すると手紙を書いてきたが、啄木は経済的に難しいからもう少し待ってくれと返事をしてきた。しかし、朝日新聞社の正社員になったからにはその言い訳はできなくなった。家族の上京は時間の問題となった。

※「ローマ字日記」は当然全文ローマ字で書かれているが、ここでは読み易さを考慮して漢字かなまじり文のものを使用した。『石川啄木全集 第6巻』(筑摩書房)と『啄木・ローマ字日記』(岩波文庫)。

★「ローマ字日記」は、この期限という壁の認識のある閉ざされた猶予期間内での日記である。

・4月7日(書き始めの日)

・「春! 花も咲く! 東京へ来てもう一年だ。……が、予はまだ予の家族を呼びよせ

て養う準備ができぬ！」

- ・6月の最後の「二十日間」（ローマ字日記のラストシーン）＝「十六日の朝、上野駅で（中略）汽車は一時間遅れて着いた。友、母、妻、子 ……俤で新しい家に着いた。」
- ・家族が上京し、以後は新しい物語となるところで終わる。＜初めと終わりがある＞

（2）性的に露骨な描写

- ・吉原や浅草での買春体験を赤裸々に書いている。
- ・（四月一〇日）「いくらかの金のある時、予は何のためらうこともなく、かの、みだらな声に満ちた、狭い、きたない町に行った。予は去年の秋から今までに、およそ十三〜四回も行った。そして十人ばかりの淫売婦を買った。ミツ、マサ、キヨ、ミネ、ツユ、ハナ、アキ、……………名を忘れたのもある。予の求めたのは暖かい、柔らかな、真っ白な身体だ。身体も心もとろけるような楽しみだ。しかし、それらの女は、やや年のいったのも、まだ、十六ぐらいのほんの子供なもの、どれだって何百人、何千人の男と寝たのばかりだ。（中略）
- ・（四月二五日）ヨシワラへ行った。キンダイチ君には 二度目か三度目だが、予は生まれて初めてこの不夜城に足を入れた。（二六日）アサクサへ行った。（中略）予はわが身のおきどころが 世界中になくなったような気持ちに襲われていた。“頭が痛いから 今夜だけ遊ぼう！”それはウソにちがいない。そんならなにを予は求めていたろう？ 女の肉か？ 酒か？ おそらく そうではない！ そんなら なにか？ 自分にもわからぬ。（中略）予は二円出した。そして隣室に行って オエンという女と五分間ばかりねた。」

※鈴木志朗康＝「(性的な) 露骨さは、(中略) 当時は今ほど普及していなかったローマ字書きの日記であったからできた記述であったとしても、身体的存在へ下向して行き、そこを突き抜けて解放されようとする意識のすさまじい運動を表しているもののように思える。」

※ドナルド・キーン＝「実は読者に淫らな感情をそそるどころか、啄木の不満ないし絶望を描くばかりです。好色文学の正反対のような効果があります。」（「ローマ字でしか書けなかった真実」）

（3） 疲れたので安心したい。（4月10日）

「予は ただ安心したいのだ！ 一こう、今夜はじめて気がついた。そうだ、まったくそうだ。それにちがいない！ ああ！ 安心—なんの不安もないという心持ちは、どんな味のするものだったろう！ ながいこと—もの心ついて以来、予はそれを忘れてきた。ちかごろ、予の心のもっとものんきなものは、社の往復の中ばかりだ。家にいると、たいへんだ、もう、なんのことはなく、なにかしなければならぬような気がする。（中略） どんなのんきなことを考えているときでも、しよっちゅううしろから、“なにか”に 追っかけられているような気持ちだ。」

予の性格は 不幸な性格だ。予は 弱者だ、たれのにも劣らぬ 立派な刀をもった 弱

者だ。戦わずにはおられぬ、しかし、勝ことはできぬ。しからば死ぬほかに 道はない。しかし 死ぬのは いやだ。死にたくない！ しからば どうして生きる？ なんにも知らずに 農夫のように 生きたい。予は あまりにかしこすぎた。発狂する人が うらやましい。

(4) 死による安らぎを。詩で書く。(4月10日)

「しかし予は疲れた！ 予は弱者だ！
一年ばかりの間、いや、一ヶ月でも、
一週間でも、三日でもいい、
神よ、もしあるなら、ああ、神よ、
私の願いはこれだけだ、どうか、
身体をどこか少しこわしてくれ、痛くても
かまわない、どうか病気をさしてくれ！
ああ！ どうか……………

真白な、柔らかな、そ！
身体がふうわりとどこまでも——
安心の谷の底まで沈んでゆくような布団の上に、いや、
養老院の古畳の上でもいい、
なんにも考えずに、そのまま死んでも
惜しくはない！ ゆっくりと寝てみたい！

(中略)

死だ！ 死だ！ 私の願いはこれ
たった一つだ！ ああ！
あ、あ、ほんとに殺すのか？ 待ってくれ、
ありがたい神様、あ、ちょっと！

ほんの少し、パンを買うだけだ、五—五—五銭でも いい！
殺すくらいのお慈悲があるなら！

(5) キンダイチに対するバカ真似

・(4月16日)「夜になった。キンダイチ君がきて、予に創作の興をおこさせようと、いろいろなことを言ってくれた。予は なんということもなく、ただもう、むやみにコッケイなことをした。“自分の将来が ふたしかと思うくらい、人間にとってあんなことはありませんね！ ハ、ハ、ハ、ハ！ キンダイチ君は横に倒れた。予は 胸のあばら骨を トントン指でたたいて、”ぼくが今なにを——なんの曲をひいているか、わかりますか？ “

あらんかぎりのバカまねをして、キンダイチ君を帰した。そして すぐペンをとった。三〇分すぎた。予は 予がとうてい小説を書けぬことを またまじめに考えねば ならなかった。予の未来になんの希望もないことを 考えねばならなかった。そして予は またキンダイチ君の部屋に行って、かずかぎりのバカまねをした。胸に大きな人の顔をかいたり、いろいろな顔をしたり、口笛でウグイスやホトトギスのまねをしたり——そして最後に予は ナイフをとりあげて 芝居の人殺しのまねをした。キンダイチ君は 部屋のそとに逃げ出した！ ああ！ 予は きっとそのとき ある恐ろしいことを 考えていたに相違ない！（中略）自殺ということは 決してこわいことではない と思った。

6 まとめ

（1）研究者の意見

※鈴木志朗康＝「書いている人の、追いつめられた存在が直接伝わってくるし、そこには書くという以外になかった人間の言葉があるように感じるのだった。」

※桑原武夫＝「「ローマ字日記」は、啄木の生活の実験の報告だが、同時に、彼の文学の実験であったことはいままでもない。それが文学者ということだが、彼は文章の力によって自己を究極まで分析しようとした。（中略）あのような赤裸々な生活の描写、それは明らかに自然主義文学が存在したならばこそ可能になったものである。」

★ドナルド・キーン＝「ローマ字で書くこと自体、一種の冒険だったのです。つまり、他人が読めない、あるいは多分読めないことを前提にして、この日記の場合は何も心配しなくてもよい、どんなことを書いても他人には絶対に読めない暗号のようなものだ、という安心感があって、普段は決して表現しないような記述も平気で、ありのままにできました。」「隠れ蓑だったのです。」（「ローマ字でしか書けなかった啄木の真実」初出「新潮45」1986年10月号）

★キーンの評価＝「明治時代の文学作品中、私が読んだかぎり、私を一番感動させるのは、ほかならぬ石川啄木の日記である。（中略）明治文学とはなによりもまず森鷗外や夏目漱石の傑作だろう、と考える人たちにとっては、私の右の意見は、あるいは意外に響くかもしれない。（中略）啄木日記のほとんどすべて文章が、私の心を打つということ、そして他の誰よりも、啄木のことを、まるで親友であるかのように感じる、ということにはほかならない。」（「啄木日記」『続百代の過客下 日記に見る日本人』朝日選書、1988年）と記している。また、「歌よりも日記が本当の啄木に近いと思う。（中略）恐るべき正直さで自分の総ての考えや感情を記録した。これが彼のローマ字日記で、啄木文学の最高峰であると思う。」（「啄木の日記と芸術」昭和30年）

- ・キーンが啄木日記、とりわけ「ローマ字日記」に感動したのは、「作者の赤裸々は表現」「徹底的に正直だった」「ひたすら真実に語る」姿であると思われる。
- ・なぜ、キーンはそこにこだわったのか。そこに、キーンの戦争体験がかかわっている。キーンはコロンビア大学で日本語を勉強し、アメリカ軍の情報将校としてハワイで3年

間、押収された膨大な日本軍の書類を翻訳した。「日本の兵士の日記があった。おそらく最後の一行を書いた後に太平洋の環礁の上か海の中で死んだに違いない人々の苦難を綴った感動的な日記を読んで、わたしはどんな学術書や一般書を読んだ時よりも日本人に近づいたという気がした。」(『日本人の戦争 作家の日記を読む』文藝春秋社)、「兵士たちは、日本にいる間は日記のページを愛国的な常套句で埋めたものだった。(中略)(しかし死に直面したら) 日記の筆者は本当に感じたことを書いた。(中略) これらの日記は時に堪えられないほど感動的で、一兵士の最後の日々の苦悩が記録されていた。」(『ドナルド・キーン自伝』中公文庫)

★<啄木は初めから赤裸々に書くつもりであった>

・(明治41年7月7日、岩崎正宛)「僕は僕の小説において、自分がまず素裸体(すっぱだか)になつて、一点の秘すところなく告白しようと思ふ。そして一切の人物を捉え来たつて、矢張り僕と共に素裸体にしようと思う。仕立屋の縫つた衣服を着てゐるうちは駄目だ、虚偽だ。まづ裸体にならなければならぬ。裸体になつた上で、寒かつたら寒いやうな、暑かつたら暑いやうな、それ相応な衣服を新らしく作らなければならぬ。」

※二十代の青春時代は、いつの時代であってもまたどこの国であっても、自らの進路や家族や学校や職場、そして性的なことや恋愛や結婚などをめぐって大いに悩む年代である。そして理想が高ければ高いほど、より苦悩することになる。

・啄木は、その心の危機のバランスをとるためもあって書き続けた。そしてできれば、作品として残したいと考えていた。そのことが一致したのがローマ字による日記であった。この仮面をかぶることにより、赤裸々な日記ができあがることになった。

★キーンは、啄木作品では「絶えず自分の中からわいてきて押さえきれないような短歌、あるいは寝る前に走り書きした日記は実に面白いのです。」と書き、啄木の才能は「即興詩人としての天才でした」と書いている。そういう「即興詩人として書いている部分」は面白いと書いている。

・そのように火山が噴火するように即興的にどンドン書いている時にこそ、啄木の心は穏やかに安定していたのだと思う。もっともこのようなことは、啄木だけでなく多くの文学者にも共通したことと思われる。

★この後の<時代の変容と啄木>

・明治43年(1910年)—5月、幸徳秋水らの無政府主義者陰謀事件が発覚し、以後「大逆事件」の資料を集め記録する。これは後に「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現象」となっている。(大逆事件は、長野の職工の宮下太吉が天皇暗殺を計画し、それに管野スガ等数人が賛同を示したものとされる。幸徳は微妙な立場であった。) 啄木は、新聞社にいたため記事にできない内部情報まで知っていた。また大逆事件の弁護士の一であった平出修から数多くの資料を入手しそれを書き写した。

・8月頃「時代閉塞の現状」執筆。(まず現状を、「青年を圍繞(いじょう=取り囲む)する空気は、今やもう少しも流動しなくなった。強権の勢力は普(あまね)く国内に行亘(ゆきわた)つてゐる。」と分析する。このような閉塞した時代状況の中で、青年は理想を見失い、強権に対する抵抗をあきらめてしまつて享楽主義に走っているとし、その青年に危機感を持ち、組織的なく明日の考察>をするように訴える内容となっている。)

・10月「創作」に「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつゝ秋風を聴く」(8月に日韓併合の発表があった。)発表。

・明治44年(1911年)—1月、幸徳秋水ら24人死刑判決の報道に衝撃を受ける。(翌日天皇の恩赦により、半分の12人が減刑され無期懲役などになった。)

・弁護士平出修の言葉「もし自分が裁判長だつたら、管野スガ、宮下太吉、新村忠雄、古河力作の四人を死刑に、幸徳大石の二人を無期に、内山愚童を不敬罪で五年位に、そしてあとは無罪にすると平出君が言つた。」(啄木日記、明治44年1月3日)

・管野スガ「死出の道草」には、「今回の事件は無政府主義者の陰謀といふよりも、寧ろ検事の手によつて作られた陰謀といふ方が適當である。」

・弁護士鵜沢聡明「大逆事件を憶ふ」(昭和25年)「第一に政治的な背景としては、当時の桂内閣が、没落する藩閥軍閥政治の最後の拠点であり、新興する自由主義的な政党政治の、当時としては極めて急進的な攻勢に対して、大逆事件が一つのデモンストレーションを意味するものではなかつたかと言ふこと。第二にはその頃欧米のアナーキズムが、暴力的なテロ行為を続々と惹起していた世界的な情勢から、当時の検察官当局が、日本の無政府主義者に対し弾圧の機会をねらつてゐたのではないかと思はれる点である。」「共同謀議を意味するやうな、全被告に共通な一貫したものは一つもなかつた。」

・2月慢性腹膜炎で入院。4月土岐哀果と雑誌「樹木と果実」の計画を企てるが断念。6月、詩「はてしなき議論の後」執筆。(後に私家詩集『呼子と口笛』になる)、12月第一歌集『一握の砂』刊行。

・明治45年(1912年)4月13日に亡くなる。若山牧水等が最期を看取る。(26歳と2ヶ月)(夏目漱石、北原白秋等が葬式に参列。)遺骨は函館の立待岬に葬られる。現在、そこは啄木一族の墓となっている。

・<没後>の6月に第二歌集『悲しき玩具』刊行。